

# 「更生簡単じゃない」社会

## 犯罪当事者 つながり喪失

### 孤 絶

北新地ビル  
放火殺人1年

谷本盛雄容疑者「死亡当時(61)が踏み出そうとした再起の道は険しかった。再就職の壁になったのは殺人未遂罪という前科。そう本人は思い詰めていた。法務省の「再犯防止推進白書」によると無職者の再犯率は有職者の約3倍で、刑務所再入所者のうち約7割が無職だった。容疑者と似た状況に陥った男性(49)は「社会とのつながりを一切失った」と語る。

めする時だけの生活が続いた。自殺も考えた。それでも何とか前を向こうと人材派遣会社の求人に応募した。結果は「ことごとく不採用。」「名前を調べて逮捕の報道を見たに違いない」。そうしか思えず、「日本で生活するのは無理だ」と絶望した。

社長の草刈健太郎さん(49)は、米国で妹を殺害された犯罪被害者遺族でもある。当初は「何で遺族の俺が犯罪者の面倒を…」と思っていた。ボランティアに熱心だった妹を思いプロジェクトの参加を決断したが、受け入れてみると我慢の連続だった。無断欠勤、同僚の財布からの抜き取りといったトラブルは日常茶飯事。それでも見捨てることなく、計23人を雇用してきた。再犯による、さらなる被害者は生み出したくないから、「いつ自分が被害者になるか分からない。再犯を減らすには寛容な社会が必要だ」と断言する。



出所者らを雇い、更生を支援している「カンサイ建装工業」の草刈健太郎社長(中央)＝9日、大阪市

男性は2014年に覚醒剤取締法違反容疑で逮捕された。事件は報道され、今も名前を検索すると当時のニュースがヒットする。家族や友人との縁も切れ、ひきこもり状態に。外に出るのは月1回たばこを買いだ。

暗い気持ちのまま前科者を雇用する企業を調べ、メールを送ると、面接に進んだ。「来週からうちに来て」。うれしきで身震いした。逮捕から約5年後のことだ。男性を雇ったのは大阪市淀川区の「カンサイ建装工業」。前科などがある人を積極的に採用する「職親プロジェクト」の参加企業だ。

谷本容疑者が11年に起こした長男への殺人未遂事件で、大阪地裁判決は「家族以外との関わりを持つことができれば、更生は十分可能だろう」と締めくくっている。

出所者らを雇い更生を支える「協力雇用主」として登録された企業などは20年時点で2万4千を超えた。だが実際に雇用していたのは5・7%。判決が言うほど簡単に更生できる社会じゃない。草刈さんの実感だ。